

阿部民子

Abe Tamiko

illustration: Shigeyuki Sakata

新しいまちの“へそ”となる 新商店街の再出発

宮城県南三陸町・震災復興まちづくり事業 (2012年◆平成24年～)



決して忘れることのできない2011年3月11日。その日から6年がたとうとする3月3日。復興への新たな光が、また一つ灯った。宮城県南三陸町志津川地区。震災前より10メートルもかさ上げされた新しいまちの中心部に、「南三陸志津川さんさん商店街」がオープンした。敷地は約2万平方メートル。フードコートやイベントに使える多目的スペースを囲うように、木目の美しい南三陸杉を使った平屋が6棟。南三陸の豊かな海の幸を扱う鮮魚店やご当地グルメが食べられる飲食店など、28店舗が集結している。

午前10時から行われたオープニングセレモニーでは、施設を運営する「南三陸まちづくり未来」の三浦洋昭社長が「さまざまな思いの結晶が今日3月3日。南三陸町の森、里、海、人の資源の発信拠点を目指し、被災地の創造的復興の見本となるよう、未来を背負う覚悟で元気に邁進したい」とあいさつ。会場は温かな拍手に包まれた。

復興の元気をつくる商店街に

宮城県北東部に位置し、北は気

は不安もありましたが、「みんながこのまちのために協力しよう」という先輩の言葉に背中を押されました。今日は昔のお客さんにも来ていただいで、やってよかったです。すぐくうれいすね」と顔をほころばせる。

「南三陸志津川さんさん商店街」の売りのひとつが、美しい店舗デザインだ。設計は、新国立競技場を手がける建築家の隈研吾氏。商店街を含む、復興市街地のグラウンドデザインも手がけている。多忙の合間を縫って何度も南三陸町に足を運び、まちの人たちと飲み、語り合いながらデザインを決めていった。

「最初に

仮設の商店街を訪れたとき

『人間の香りがするいいまちだな、プレハブでもこんないいものがないので



るんだから、本設ではもっとヒューマンで、もっと海が近くに感じられるものになりたい」と思いましたね。町と僕が同じく目指したのが、南三陸らしいものをつくりたいという思い。そこから、南三陸の杉を使うことや、縁側のようなスペースを設けること、建物に微妙な角度をつけて海が近く感じられるようなデザインコンセプトを考えていきました。複雑な地形と独特の文化がある東北は、日本の宝。東北こそ、これからの日本を支えるものだと思っっているんです。その復興の元気をつくる場として、この商店街が核になってほしいと思っ、これからも応援を続けます」

津波で命を失わないまちづくり

現在、南三陸町の舵取り役を務める佐藤仁町長は、震災当日、防災対策庁舎の屋上に逃れて助かった10名のうちの1人。それだけに、復興への思いは人一倍強い。「6年前に防災対策庁舎の屋上でまちがつぶれていくさまを見て、こんな日がくるとは正直、夢にも思っっていませんでした。この商店

仙沼市、南は石巻市に接する南三陸町。名産のタコやアワビ、ワカメやカキなど、太平洋の海の幸に恵まれた町は、あの日、潮上高20メートルを超える津波に襲われた。まちの6割を超える建物が流され、安全と思われた防災対策庁舎で町職員43名が犠牲になるなど、甚大な被害に見舞われた。失意のなか、立ち上がったのがまちの商店主たちだった。震災からわずか1カ月半後の物資の乏しい中で「南三陸復興市」を開催。2日間で1万5千人もの人々が集まる盛況を呈した。

復興市の活況に力を得て、震災から約1年後の2012年2月、32店舗が集まってできたのが、仮設商店街の「南三陸さんさん商店街」だ。仮設のプレハブ店舗ながら、名産のイクラとサーモンをふんだんにのせた「南三陸キラキラ丼」も呼び水となり、4年6カ月で約200万人が訪れる名物商店街となった。その成功を経て、仮設時の32店舗のうちの23店舗に新しい店舗が加わり、今回の本設店舗開店となったのだ。「今日の日を迎えて、身の引き締

街こそ、まちのへそだと思っています。ここを中心として、明るいにぎやかなまちができるように」と力を込める。

町長の目指す「津波で二度と命を失わないまち」づくりに向けて、タッグを組んだのが、UR都市機構だ。東日本大震災以降、URは宮城県を始め、岩手県、福島県などの24の被災公共団体で復興支援事業を行っている。市街地整備事業や災害公営住宅建設などを手がけ、現在も約400名の職員が復興地で奮闘を続けている。

志津川地区では、URは3つの高台造成と低地部の区画整理、災害公営住宅の建設を担当。まちの「なりわいの場所は様々であって、住まいは高台に」の基本方針に基づき、山を切り拓いて高台に住宅や公共施設を移転、造成によって生じる土砂を低地の盛り土に活用し、「南三陸志津川さんさん商店街」をはじめとするなりわいの場所を生み出す壮大な工事を敢行してきた。既に平成28年度で、高台につくったすべての住宅地および災害公営住宅の引き渡しを完了し、人々の新しい暮らしが



まる思いです」と語るのは、南三陸志津川さんさん商店会の阿部忠彦会長。明治41年創業の「阿部茶舗」の社長でもある。南三陸伝統の切り紙細工「キリコ」をあしらった明るい店内には、銘茶やアレンジティー、ソフトクリームを食べられるティールームも併設。オープンと同時に、お茶とおしゃべりを楽しむ人でにぎわった。「うちのお客さんは地元の方が多いのですが、避難所から仮設住宅、仮設住宅から本設住宅と、なかなか落ち着きどころがなく、コミュニティも崩壊してしましました。それだけに、この店が交流の場になればと思っっています」同じく商店街に店を構える明治42年創業の洋菓子店「雄新堂」では、ひなまつりケーキや和菓子を求める人でレジに行列ができていた。社長の阿部雄一さんは「最初

始まっっている。UR都市機構南三陸復興支援事務所の南木宏和所長は語る。「商店街の土地は、2016年3

月に先行的に造成を終えましたが、今日のようにたくさんのお客さんが来てにぎわいを感じられると、またうれしさが増しますね。壊滅した状態から新たなまちをつくる難しさとともに、国道や河川、防潮堤など管轄の違う事業を同時に進めていくなど一筋縄ではいかない仕事ですが、町や関係業者と力を合わせ、計画を前倒しする気持ちで取り組むたい」

商店街の周辺では、平成30年度の完成を目指し、まだ復興工事が続く志津川地区。だが、今月には隣の歌津地区に、新商店街「南三陸ハマーレ歌津」がオープン、夏には県内有数の賑わいをもよおした海水浴場が部分的に再開される見込み。南三陸町のにぎわいを取り戻す歩みは、確実に、しっかりと前を向いて進んでいる。

UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
[企画制作]新潮社